談話室

気がついてみたらオーガニック検査員

オーガニック検査に関わって約10年になるが，「どうやってオーガニック検査の仕事を選んだか」というような質問をよくされる。

オーガニック検査およびトレーサビリティ検査では，実地で聞き取りや現場確認を行い，家でレポート作成となるが，実地ではいかに相手を早くリラックスさせて検査モードにリードしていき，相手の検査に至った背景及び全体像を把握すると同時に，相手の基準の理解度をチェックし，的確な情報を入手するかが重要なポイントとなる。またこのような第三者認証は消費者の安心のためにあるので，検査員は「消費者の代表」として検査していることを忘れず客観的に報告せねばならない。客観的に報告することで頑張っている生産者等を陰ながらサポートすることもできることになる。検査を行うには基準を十分に理解し検査関連の勉強をし続けなければならないが，素晴らしい人々との出会いがあり，やりがいのある仕事だと思う。

こういう検査をもはや900件ほど実施し，日本では一番多くこういう検査をしたのではないかと思うが，当初は検査の仕事を本業にするなどとは夢にも思わなかった。子供の頃の夢はバスの車掌さんになることだったのだが，いつのまにかバスがワンマンバスになってしまい私の夢は早々と砕かれてしまった。次なる関心は語学に関する仕事だったが，商社に入って英文の貿易関係文書の作成や通訳をして，そうこうする内に自らの翻訳・通訳会社を友達と設立することにし，通訳を通じて出会った人々や交換留学の際に語学講師の助手として働いた経験から，大学で語学を教える資格を取得しようと米国の大学院に進んだ。米国の大学や大学院では宿題量が半端ではなく，山のようなリーディング資料とレポート作成に悩まされた。米国人の教授相手ゆえ，論理的で簡潔な文書作成を求められ鍛えられた。念願叶ってミネソタ州立大学で講師として日本語を教えることが出来たが，必ずしも教え方が上手ではなくても論文発表数が多い先生が出世し，生徒思いで生徒に時間を費やした心ある先生がそれらの若い先生方に地位を奪われてしまうという大学の現状に嫌気がさし，純粋に語学に興味のある人達に教えたいと思い専門学校で教えることを続けた。

また私はもともと食への執着がすごく，それゆえ自分の納得したものを食べたいとあちこち食べ歩いたり，料理も大好きでミネソタでは料理学校にスカウトされ料理講師として教えたりもしていたが，20年前の食養（注1）及びオーガニック食品との出会いが私にとってターニングポイントとなり，ただ単に食べたいものを食べるのではなく，体を作っている食べ物をバランスよく食べなければならないということを学んだ。そして「身土不二」の教えの土と体は同じゆえ，土地のもの，季節のものを食べるのが体に合っているという理論もとても納得いき，それまでやや病弱だった私は東洋医学の勉強をしたり，自然療法の勉強をしたり，体を作る大切な食品のせめて一部でもと自ら家庭菜園で野菜を作ると同時に生産者の手伝いをしたりした。

そうこうするうちに帰国することになり，入った自然食品店には「有機低農薬米（注2）」とか表示されているものがあり，何を信じて買っていいやらわからないという状況の時に米国で購入していた日本のオーガニック認証品の検査見習をさせてもらうチャンスを得，先輩検査員らの勧めで米国での検査講習会に行って検査の仕事をするに至った。

簡単にいうとこういう経緯で，決して検査員になろうと思ったわけではなく好奇心のままに行動していって結果として今がある。人生というのは本当にわからないものだとつくづく思う。バスがワンマンバスになっていなかったら私は今ごろ車掌の仕事を経てバス会社に勤務していたかもしれない。

しかし，商社での英文貿易文書の読解は輸入業者等の書類解読に役立ち，苦しい学生時代の経験がレポート作成において生かされ，食に費やした費用・エネルギーは重要な参考知識となり，教師をしていたことでいろいろな人との接触が苦ではなく，相手の背景を察し，全体像を把握することに役立ち･･･というように何気なく意味なく積み重ねてきた経験が全て役に立っている。また振り返ってみると，自分にとってその時，苦しい体験と思えたことが自分を鍛えてくれたことを思うと，人生って計画されているのだろうかと不思議な思いに浸っている今日この頃である。

（注1） 日本の自然にのっとった古い伝統のある食生活を見直し，食べ物によって病気を治すという理論。明治20年代に石塚左玄氏が提唱。

（注2） 有機＝原則的に無農薬無化学肥料栽培されたもの。

（（有）リーファース代表取締役　水野葉子・みずのようこ**）**